

共同研究の経過と概要

高橋 敏

はじめに

本書は、国立歴史民俗博物館が平成八年度（一九九六）から平成十三年度（二〇〇一）までの六カ年に実施した基幹研究「地域社会における基層信仰の歴史的研究」のB班「地域社会・文化の諸相と基層信仰」の報告書である。因みに第一期（平成八年度から平成十年度の三カ年）はフィールドワークを主体にA班を含め合同で行い、第二期（平成十一年度から平成十三年度）はB班独自に研究分析を深めた。

もとより国立歴史民俗博物館では大学共同利用機関として共同研究を組織・実施することが本務である。また研究テーマとして創立当初より民衆の生活文化を基軸に都市と基層信仰を取り上げてきた。本共同研究は、「地域社会における基層信仰の歴史的研究」を主題に地域のフィールドワークを基礎に個別分析を総合的に行うことを目指した。そして西日本の奈良県宇陀郡を中心とする東山中と東日本の千葉県東総地域を選定し、先行研究に学びながら歴史学をはじめ関連諸科学の協業をベースに研究分析を積み上げてきた。いわば地域史の成果に学びながらこれに民俗学、考古学はもとより広汎かつ多様な分析手法を駆使して基層信仰をキーワードに地域の歴史像を描き出そうと試みたわけである。東総地域は本館の所在する千葉県の東部に位置し、地域的便宜さに恵まれ、

フィールドワークに適した対象と言える。

また、共同研究には千葉県下の博物館、高校等に勤務するいわば地元の若手研究者に参加をお願いした。千葉県下の地域史研究の刺激剤となることへの期待もあった。共同研究終了から一年、多忙のなか寄稿いただいた関係者各位に感謝する次第である。

1 目的

日本人の基層信仰を、カミ信仰・祖先信仰・仏教信仰などに分解して理解するのではなく、それらの複合的全体として把握し、それぞれの時代の地域社会において実際に機能した基層信仰の実態とその歴史の変遷過程を明らかにすることを目的とする。このため、地域社会における祭祀・芸能・葬制・墓制・村落構造・民衆文化、さらに支配や流通など政治・経済とのかかわりをも含めて、それらと基層信仰とのかかわりを構造的に究明する。

叙上の趣旨を東総地域に適用するならば、当然幕末にこの地域を巻き込んだ一大宗教運動の大原幽学を取り上げることになる。この共同研究は地域の個別研究分析から全体像を積み上げることを目的とする。従って大原幽学と東総地域社会の関係史が主たるねらいとなった。もとより大原幽学という人物自体が謎に包まれており重大な研究対象となる。ま

たその周辺の性学という独特の教団の解明も求められる。

しかし研究の方向性は大原幽学と教団に止まるものではなく、それらの基盤となった村落社会の実態、村落構造、家族、祭礼、儀礼に波及し、これらを包み込む東総地域総体の動脈ともいえるべき産業と流通、そこには干鰯・醤油の特産があり、これを江戸から全国市場へ搬出する利根川舟運その他の水上陸上交通があった。

分析の視覚は共同研究者の問題意識とフィールドに絞られていく。まず基層信仰、特に大原幽学をキーワードに緩やかなしぼりで全体像を折出すことに努めた。

2 経過

平成八年度（一九九六）

第一回研究会 一九九六年七月二十七日 国立歴史民俗博物館

白石太一郎「宇陀地方における中・近世墓制の提起する問題」

高橋 敏「東総地域史研究の問題点」

研究計画の検討

第二回研究会 一九九六年十月二十六～二十七日

粟田則久「東総地域の古代から中世の墓制」

松丸明弘「東総地域と大原幽学」

和田 萃「宇陀の水分信仰をめぐる」

田村憲美（ゲストスピーカー、別府大学）

「中世大和の村落をめぐる」

第三回研究会 一九九七年一月十二日

幡鎌一弘（ゲストスピーカー、天理大学おやさど研究所）

「明治初年の宗教の世俗化―奈良県における開化政策と

宗教―」

米谷 博「いわゆる勢力富五郎関係史料について」

第四回研究会 一九九七年三月七～九日

奈良県宇陀地域での現地調査・研究会

宇陀地域の神社・寺院・墓地などの現地調査

村田修三（ゲストスピーカー、奈良女子大学）

「中世の宇陀地方」

柳澤一宏（ゲストスピーカー、榛原町教育委員会）

「最近の宇陀地方における中世墓地の発掘調査」

〔西日本班〕（略）

〔東日本班〕

九月 共同現地踏査

九～三月 利根川河岸関係文書の調査

十一～三月 大原幽学記念館収集文書の調査

十一～三月 千葉県立図書館などの関係文書の調査

平成九年度（一九九七）

第一回研究会 一九九七年七月十八日 国立歴史民俗博物館

佐藤真人「日吉大宮縁起と山王祭」

福原敏男・橋本裕之

「奈良県山添村六所神社の秋祭・その一」

第二回研究会 一九九七年十一月三日

高橋 敏「牛渡村一件について」

白石太一郎・設楽博己・千田嘉博・朽木 量

「奈良県菟田野町入谷墓地の測量調査」

福原敏男「奈良県山添村六所神社の秋祭・その二」

第三回研究会 一九九八年一月九日

米谷 博「性学墓について―千葉県香取郡山田町の事例から―」

白石太一郎「考古学からみた両墓制の成立」

大宮守人「奈良県斑鳩町服部神楽講文書について」

第四回研究会 一九九八年二月十五～十六日

千葉県東総地域での現地調査・研究会

東総地域の資料館・神社・寺院・墓地などの現地調査

〔西日本班〕 (略)

〔東日本班〕

六月六日 研究報告会 高橋 敏

「日中文化交流の一コマ―水滸伝の撰取と展開―」

七月二十六～二十八日 干潟町の現地調査

十一月二十九日 研究中間報告会

一月二十四日 研究中間報告会

七～三月 各メンバーによる個別調査

平成十年度(一九九八)

〔西日本班〕

第一回研究会 一九九八年九月九日 国立歴史民俗博物館

白石太一郎・設楽博己・千田嘉博・朽木 量

「都祁村吐山所在墓地の考古学的調査」

新谷尚紀・関沢まゆみ

「吐山の墓地と先祖供養についての調査報告」

上野和男「吐山およびその周辺地域の墓制―形成過程と構成原

理―」

第二回研究会 一九九九年三月十五日

今尾文昭「東大寺三社池出土の卒塔婆をめぐる問題―南都におけ

る近世移行期の一側面―」

湯浅 隆「東総地方椿新田一帯における寺社の配置と信仰」

福原敏男「高山八幡宮の宮座行事」(ビデオ上映)

〔東日本班〕

第一回研究会 一九九八年六月二十二日 国立歴史民俗博物館

米谷 博「明治期千葉県の墓制管理」

鈴木映里子「干潟町の筆子塚」

湯浅 隆「諸徳寺村永命寺の起源」

第二回研究会 一九九八年九月二十七日

松丸明弘「大原幽学の性学教化運動と教団組織の成立」

米谷 博「鎭木地区宿内の墓地について」

鈴木秀幸「幕末維新期における教育関係史料の所在と調査」

鈴木映里子「諸徳寺村菅谷又左衛門家について」

湯浅 隆「諸徳寺村脇鷲神社関係史料」

宮本袈裟雄「干潟村長部地区調査概要」

第三回研究会 一九九八年十一月二十八日

高橋 敏「東総地方史研究の到達点と課題」

湯浅 隆「文久二年における名古屋の大原幽学菩提寺への墓参関

係史料」

第四回研究会 一九九九年二月六日

米谷 博「近世利根川水運と東下総地域」

菅根幸裕「海上郡龍福寺大太刀の銘文について」

杉 仁「在村文化と基層信仰、幕末の展開」

その他活動 東総地方における民俗調査

平成十一年度(一九九九)

第一回研究会 一九九九年七月三日 国立歴史民俗博物館

鈴木秀幸「村の中の歌人・朝日商豆」

岩田みゆき「情報ネットワークの形成と地域社会―日記史料の語る

もの―」

原 直史「九十九里産魚肥流通をめぐる地域の構造と変容」

第二回研究会 一九九九年十月三～四日

千葉県千潟町、大原幽学記念館、三川浜

栗田則久「山田町における性学墓調査の概要」

後藤雅知「近世房総地域における海付村落の構造」

鈴木映里子「熊野神社神幸祭について」

現地調査 熊野神社神幸祭の浜下り

第三回研究会 二〇〇〇年三月十九日

松丸明弘「大原幽学と教団組織の成立」

古川元也「北陸における法華（経）信仰の展開」

朴澤直秀「近世における宗判寺檀関係めぐって」

湯浅 隆「椿新田成初期の神社と寺」

平成十二年度（二〇〇〇）

第一回研究会 二〇〇〇年七月三日 国立歴史民俗博物館

鈴木映里子「熊野神社 明治初期の氏子の動向について」

後藤雅知「近世後期の漁業構造と地域社会」

高橋 敏「史料紹介 牛渡村一件」

木塚久仁子「常総地域を考えるために——『常総地域』と近世地理学者——」

第二回研究会 二〇〇〇年十二月十一日

川崎史彦「大原幽学没後における地曳網水主の飲酒規制——九十九

里地域を事例に——」

米谷 博「利根川の対岸交通を考えるための研究ノート」

現地史料調査：東総

第三回研究会 二〇〇〇年二月十八・十九日

現地史料調査：東総

九十九里町いわし博物館、飯岡町歴史民俗資料館、旭市長禪寺、岩井家墓地、幽学丹精碑、銚子市外川漁港

3 共同研究員（*は研究代表者）

岩田みゆき 神奈川大学日本常民文化研究所

木塚久仁子 土浦市立博物館

栗田則久 千葉県教育庁文化課

米谷 博 伊能忠敬記念館

後藤雅知 千葉大学教育学部

菅根幸裕 國學院大学栃木短期大学日本史学科

鈴木映里子 大原幽学記念館（千潟町教育委員会）

鈴木秀幸 明治大学史編纂事務室

原 直史 新潟大学人文学部

古川元也 神奈川県立歴史博物館

松丸明弘 千葉県立柏高等学校

宮本袈裟雄 武蔵大学人文学部

*高橋 敏 本館歴史研究部

〔研究協力者〕

川崎史彦（リサーチアシスタント、早稲田大学）

阿部綾子（筑波大学大学院生）

星野順子（武蔵大学大学院生）

※研究期間

平成八年度（一九九六）～平成十三年度（二〇〇一）

第一期 平成八年度（一九九六）～平成十年（一九九八）の三カ年

第二期 平成十一年度（一九九九）～平成十三年（二〇〇一）の三

カ年